

鏡、鏡草、挂錠、竈牌、竈簾、及箆瓢、箕帚、竹筐、磁器、缶器、鮮魚、果蔬諸品不絶、鍛磨、磨刀、殺雞、諸色工人亦應時而出、喧於城市、酒肆藥鋪各以酒糟、蒼朮、辟瘟丹之屬餽遺于主顧家、總謂之年市、蔡雲吳歛云、送竈柴枝束々、齊照厨竹挂雙々、提、燂湯、礪刀、獨何業、慘聽連聲叫殺雞、案、馮贊雲仙雜記、僧園逸記皆載、都下寺院每用歲除鍛磨、是日作鍛磨齋、吳自牧夢梁錄、歲旦在邇、席鋪、饋與主顧、更以蒼朮小棗辟瘟丹相遺、

〔江戸總鹿子新增大全七〕

江都年中行事十二月十七日十八日

晝

淺草市

正月の飾物、其外品々

、江府第一の市也

淺草橋より、御藏前、駒形、雷神門の東西寸地も明間なく、後は砂利場、山の宿に至り、曰木鉢、手桶等の品々を商もの、市の假屋のどよむ聲賑はしく、武士方町百姓ともに男女老少群集して蟻のごとし、

〔燕石襟志三〕淺草事實 毎年十二月十七日十八日にたつ淺草の市は、いかなる故に、正月の物を賣買するとして、佛閣に参りつどふにやと、こゝろ得がたく思ひしかば、これを土老に問に、この市は當初雷神門の左のかた、大神宮の攝社なる蛭子の宮の市なりき、往昔は十二月九日十日兩日なりしが、觀世音の會日には、參詣の老幼群聚する事、市の日にましたり、よりてこの市を十七十八兩日にせば、便宜なるべしとて、遂にその事を聞えあげて、今のごとくにはなりしといへり、しがるや否はしらす、

〔塵塚談下〕淺草觀音の市、十二月十七十八兩日也、諸人正月のかざりの物を吉凶をいはひ、此市にて求る事なり、外に江戸に市なし、故に並木町より雷神門内までは、老人小兒の通行思ひもよらぬ事にて、俳句に、市の人人より出て人に入る、といふ句も有しに、近ごろに至り、神田明神、深川八幡、芝愛宕、麴町天神に市はじまり、人も相應に出て賑かなり、麴町はわけて群集なすよし、其故にや、近歲觀音の市、先年よりは淋しきやうに見ゆる、